

初恋の殉職して天空に咲いた大和撫子

森岡博美

昨年八月十五日、今日は終戦記念日だからテレビ番組に、終戦に関係したものはないかと電源をONにした。NHKの番組で、日本名の樺太豊原にて電報電話局の交換任務に就いていた七名の交換女性が殉職した放送があった。ソビエト軍が不可侵条約を無視して樺太に進撃してきた昭和二十年八月十日のものである。電話交換の任務を最後の最後まで遂行していた女性の所までソ連軍が進行してきたのだ。彼らが、獲物として近づいて来ると、女性達は一斉に青酸カリで服毒自殺をしたのである。退避の余裕がない場合は、潔く自殺するべく常に青酸カリを所持していたのである。将に、職場死守の「大和撫子」殉職の男性の戦死にも劣らぬ放送であった。

ところで、私の海軍時代、海軍内部の命令伝達は、専用電話網が完備しており、一般社会との通話は、本部の副官部と食料購入の炊事場に佐世保電報電話局交換の電話線が引き込まれていた。電話局と同じく二十四時間の交替勤務の副官部は、佐世保鎮守府(四国、九州、沖縄の海軍所属部隊の総指揮)との直接連絡、相之浦海兵団、佐世保海兵団、針尾海兵団(海軍兵

学校分校)と横の連絡の他、鎮守府管下の各県庁、市町村役場との連絡が可能なシステムとなっていた。空襲警報が発令されていない真夜中になると、夜間勤務は退屈である。男ばかりの軍隊内で女性の声が聞ける電報電話局からの電話受付は一番人氣があった。

ある晩の深夜に、「今から、電話で交換嬢が歌で兵隊さん達を慰問させてもらいます。」というとすぐに、「明日はお立ちかお名残惜しや 大和男児の晴の旅 朝日を浴びて いで立つ君を 拝む心で送りたい」。続いて「支那の夜」等、次から次へと美声を聞かせてくれた。当直勤務の兵隊は、久方ぶりの女性達の慰問に大満足であった。が、しかし、このことが内部に拡大すると軍規がおかしくなると、私は直感した。次の一般電話が来た折りに、

「私は森岡ですが、この前の電話歌声慰問のお礼を申し上げたいので、お会いできる日時と場所を教えてください。私も日程を合致します。」と告げた。

「それでは、有名な飯盛神社の鳥居の横に大きな松の木がすぐ目に付くと思うので、そこで待つています。」と約束をした。女性の声は、ソプラノで銀の鈴を振るような良い声であり、さぞかし美人であろうと想像をした。約束の日に、時刻に遅れないように足取りも軽く、その場所に向いた。飯盛神社は、新兵卒業の記念遠足参拝で行っており、二回目となるので、迷う

ことはなかった。松の大木の横に、水玉模様のワンピースを着た、八等身で色白の美しい女性が立っていた。

「私は、森岡です。電話歌声慰問のお礼に参上しました。余りにもお上手で人気が出て、話題が広がるかと軍隊には、色々の規定があるものですから。」と御礼を言った。

「私達以上に、ご苦労をされている皆さんに、少しでも喜んで戴いたら、それでよいのです。私共が、兵隊さんのご苦労を思う心が通じて、こんなうれしい事はありません。」と涙ぐんで話された。これこそ、日本女性の愛国心が脈々と伝わってきた大和撫子である。男性はこのような女性の為に命を捧げてても良いとの気持ちになった。

「私は、阿波の徳島です。貴女は？」

「佐世保市内です。」という。

「満二十才徴兵検査で、四国、九州、沖縄の師範学校卒業した教師の免許状所持者ばかりの現役兵であり、準士官に進級後は、海軍の中核である十六才〜十七才頃の海軍志願兵の徴募官となる為の訓練を受けています。潜水艦以外の艦船は、一通り体験してもらおうと、入隊時に訓示されています。私の兵籍番号は、佐徴師八四〇番です。」と話した。

彼女は、私の名前を既に森岡だと知っていた。電話交換の折に、電話での対話から、声色で記憶していた由であった。女性の天使のような笑顔で学生時代等を色々伺っている間に門限時間となり、再会を約束して別れた。その後、二回、三回と会う度

に若い男女の恋心が生まれてきた。私には兄弟五人あり、自分一人位は佐世保で結婚しても良いのではないかと思つたが、しかし今結婚して戦死をした場合、女性は未亡人となり、父親不在の遺児が生まれる。おいそれとは、結論は出てこない。これこそ、戦時教育を受けた教育が、邪魔をすると思ひ悩んだ。戦局は依然厳しく、ついに彼女は佐世保空襲時の電話交換手殉職者の皆さんと共に散華されてしまった。「森岡さん、近くに焼夷弾落下、火災が発生しています。」と電話にて別離の言葉を残し、天空に咲く大和撫子となられてしまった。

一人の人間として生か死かの局面に立った時に、本能を乗り越えての人間としての決断は、人間教育が根底になると強く思う。命をかけて職場を守り、殉職された方々のご冥福を心からお祈りする次第である。

(平成二十四年八月十五日 終戦記念日記)